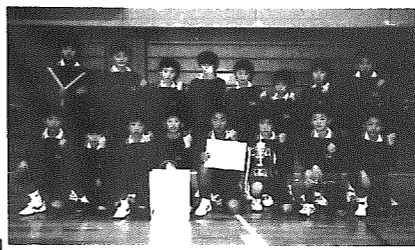


ドッジボール少年団 県大会で見事優勝

12月18日、19日、鳥屋野総合体育館で新潟県小学生ドッジボール選手権大会NSTカップが開催され、横越ドッジボール少年団が出場しました。予選リーグは3戦全勝の1位で決勝トーナメントへ進出。決勝トーナメントでも相手チームを寄せ付けず、見事優勝を果たしました。

これにより、3月6日に石川県金沢市で開催される第14回春の全国小学生ドッジボール選手権北信越ブロック大会に出場することが決定しました。この大会で優勝すると全国大会に出場できます。選手達の活躍が期待されます。



<大会結果>

- ◆予選リーグ 1位通過
- ◆決勝トーナメント
- 1回戦 Y.D.This 11-5 ビクトリーやまと (阿賀野市)
- 準決勝 11-0 アイアンヘッド笹口 (新潟市)
- 8-6
- 決勝 10-0 七葉ドラゴンズ (新発田市)
- 10-0

平成17年度 あそびの教室募集

「親子遊びを通して子どもは育つ」ということを、お母さんたちに体得してもらおうと、平成17年度あそびの教室を開催します。参加を希望される方を募集します。

子育てについて心配なことがある、子どもの発達について疑問がある、子どもとの遊び方がわからない等の方は、お申し込み下さい。

- ◆募集対象年齢 2歳～就園前児 (平成14年4月2日～平成15年4月1日生まれ)
- ◆募集人員 12名 (申込み多数の場合、中央公民館育児教室の参加の有無、年齢などを参考に選定します)
- ◆開催日 毎週水曜日 午前9時～11時15分
- ◆会場 横越町老人福祉センター内 ひまわり教室 (役場となり)
- ◆申込締切 3月3日(木)
- ◆通知 3月15日頃に個人宛に通知します。
- ◆申込・問い合わせ 健康推進課 療育教室係 ☎385-2111



句題 歳末 蒲団 蜜柑

呑めぬ酒そつと掛けやるうす布団
座の高い人程蜜柑手を伸し
閑人も減りて年の瀬誰れも来ず
初孫の穂繁に眠る蒲団かな
千蒲団屋根にのぼれば無限大
老ふたりただ黙々と蜜柑むく
年の暮夫の分まで妻走り
人形の芝居に笑い年の暮
ちらほらと杵の音して年暮るる
年の暮あまりに早く刻の過ぎ
花柄に日差し集めて千蒲団
我が刻をますます持てず年の暮
カサカサと風の音聞き蜜柑むく
娘にと野菜の届き歳の暮
蜜柑箱あけて驚くみかんかな
車窓より眺め富士と蜜柑山
天変地異つづく列島年暮るる
陽の恵み布団にためて孫を待つ
縁側の日差し恋しく布団干す
干し布団陽の香まよえて眠りけり
落雁に湖はやさしき年の暮
深かくと布団に寝息聞はずか
人の世に憂き事多き年暮る、
歳末の募金集めに廻りけり
歳末は赤い羽根からやってくる
みかん風呂匂いをつけて妻上がる
災害の復興半ばで年暮る
歳末の災害地にも雪が降る
旅の夜の蒲団の上にはばし坐し
災いを転じてくれよ年の暮
一日の天気迷わず蒲団干す
搔卷の袷別珍に取りかえて
安らぎや妻とデコボン半分こ
退職の夫に奢りし冬蒲団
夫を待つ今夜の我家蜜柑風呂

東 川根町 細山芳洲子
木 津 石井 楽秋
中 央 谷井野武士
川 根 高橋 惣士
川 根 本間 蒼
二 本 佐久間正岳
本 阿達 信峰
本 菊地 隆夫
本 藤崎 春月
本 村木 絳子
本 中川 照月
二 本 藤崎 道子
本 今井 峰雪
中 井 裕穂
木 井 斗子
二 本 坪谷 耕雨
木 津 市村 雲子
東 津 笠原 茶山
木 津 保科 蘭山
東 津 高橋 鴉子
木 津 越野 春
沢 海 沢谷 ウタ
沢 海 田辺 岳乃
木 津 今井 清水
木 津 今井 成治
木 津 伊藤 十四秋
木 津 宇野 水夢
木 津 宇野 勝幸
木 津 今井 夫子
木 津 滝沢 エツ
川 根 宇野 多取
木 津 神田 恵子
新 津 市 坂爪 よう子

横越町の歩んだ道を覗いてみよう

横越歴史探訪 12

横越の興隆に

大きく貢献した先人たち



横越の発展に尽くした名譽村民

神田 又二氏



明治7年、大字横越に生まれました。亀田高等小学校卒業。

第3・5・7・10代横越村長

村手 範氏



明治10年、大字沢海に生ま

を務め、明治から昭和にかけて算20年2か月の間、村政を担いました。

村内各尋常小学校の増改築や教員住宅の建設など村内教育施設の整備を行ったほか、阿賀野川大改修事業、二本木の寿橋架け替えなどにも取り組み、村の発展に大きく貢献しました。

昭和28年に名譽村民の称号が贈呈され、昭和28年、79歳でお亡くなりになりました。

昭和34年に新潟師範学校を卒業後、明治39年に新潟師範附属小学校から第九代横越小学校長として迎えられて以来、昭和6年の退職までの25年間、横越村の教育の発展、文化の形成に尽力しました。

学校運営のみならず、子どもや教員、青年団、一般村民などを対

伊藤 威夫氏



明治34年、大字沢海に生まれました。兄は七代伊藤文吉氏。

東京帝国大学出身で、兄文吉氏の良き協力者でもあり、北方文化博物館の創設にも協力しました。

昭和17年から21年までの間、太平洋戦争で疲弊し混乱した時期に村政を担いました。戦後、公職追放の通告を受けて村長を辞任しましたが、昭和30年に村長選挙で当選。昭和42年まで村長を務め、上水道整備や横雲橋架け替えなどを手がけ、村民の生活環境の向上に取り組み、第11・14代横越村長として村の発展に力を尽くしました。

昭和42年に名譽村民の称号が贈呈され、平成3年、90歳でお亡くなりになりました。

象に数多くの講演を行い、横越村の精神的支柱として大きな影響を与えました。

昭和28年に名譽村民の称号が贈呈され、昭和34年、74歳でお亡くなりになりました。

建部 源吾氏



明治4年、大字横越に生まれました。

勤めた後上京し、明治29年に東京帝国大学卒業、明治31年より3年間のヨーロッパ留学を経て、同

小林 存氏



明治10年、大字横越に生まれました。

明治29年に東京専門学校(早稲田大学の前身)を卒業、明治37年に新潟新聞(現新潟日報)主筆に迎えられる。ジャーナリストとして幅広く文筆活動を行いました。大正元年に同社を退社後、民間

横越が生んだ偉人

大学社会学講座の教授となり、我が国社会学の開祖と言われました。大正12年から衆議院議員を2期務め、昭和13年に貴族院議員に任命されました。

建部氏は社会学者として多くの論文著書を残すとともに、水城と号して、詩や書に数多くの作品を残しており、信念を貫き、幕末の頼山陽と比べる偉人であると評されました。

昭和20年、74歳でお亡くなりになりました。

伝承文化の研究に没頭し、郷土研究誌「高志路」の創刊をはじめ、「横越村誌」「中魚沼の物語」など多くの郷土誌を刊行。特に「越後方言考」「県内地名考」は名著とされ、小林氏の民俗学の研究と大きな業績に対し、昭和25年に新潟日報文化賞を受賞、昭和27年に日本民俗学会名譽会員となりました。氏はまた自在に生き、鳥啼(うてい)と号して句や歌に親しみ、その人柄をして今様良寛とも言われ、今でも多くの人々から敬愛されています。

昭和36年、83歳でお亡くなりになりました。